

【審査論文】

養育者が心配する1～2歳児のこわがる対象と行動の分析

河村 秋、小淵隆司、小稲 文、矢郷哲志

Analysis of toddlers' fears and behaviors that cause their caregivers' concern.

KAWAMURA Aki, OBUCHI Takashi, KOINE Fumi, YAGO Satoshi

要旨

- 【目的】本研究では、1～2歳児の養育者が心配する、子どものこわがるものや場所、子どもの行動について、子どもの月齢、性別ごとの特徴を明らかにすることを目的とした。
- 【方法】特に先天的な疾患を持たない1～2歳児の養育者1000名を対象に日本語版Infant-Toddler Social and Emotional Assessment（以下、ITSEA）を用いたweb調査を実施した。日本語版ITSEA170項目のうち12項目（A8、A36、A37、A41、A42、B21、B22、B23、C5、E15、E16、E17）に付随する記述回答の内容を調査対象とした。月齢群別（12～17か月、18～23か月、24～29か月、30～35か月）に項目の平均得点について、一元配置分散分析を用いて、男女別の項目の平均得点についてt検定を用いて比較した。記述項目の内容について、こわがるもの、場所などについての設問、子どもの行動についての設問に分けて、月齢群別、男女別の傾向を、テキストマイニングを用いて分析した。抽出した語について、語同士の類似性と共起性を示すJaccard係数を算出し、それに基づく共起ネットワーク図を作成した。
- 【結果】月齢群別平均得点：A37について、12～17か月児と24～29か月児、18～23か月児と24～29か月児、30～35か月児間で有意な差が見られた。A41について、24～29か月児と12～17か月児、18～23か月児に有意な差が見られた。A42について、12～17か月児と18～23か月児との間、24～29か月児との間、30～35か月児との間で有意な差が見られた。E17について、12～17か月児と18～23か月児、24～29か月児、30～35か月児間で有意な差が見られた。
- 男女別平均得点：A41、E17について、男児が女児よりも有意に高い傾向であった。記述内容から抽出された子どものこわがる対象は、「鬼」、「暗い」、「掃除機」、気になる子どもの行動は「頭」、「くるくる回る」、「紙」などであった。
- 【結論】子どもがこわがる対象として、低月齢では、音の出るものが多く、月齢が上がると、体験に基づくものが対象となっていた。からだをゆする、手をひらひら動かす、頭を打ち付ける、くるくる回るなどの行動は、12～23か月児の方に多く見られ、月齢が上がると減少していた。食べられないものを口に入れたり噛んだりする行動は、12～17か月の児に多く見られ、月齢が上がると減少していた。男女ともに、くるくる回る、噛む、頭を打ち付ける行動は多かったが、男児の方が叩くといった行動が多く、女児は口に入れるといった行動が多かった。月齢、性別ごとのこわがる対象、子どもの行動の特徴を踏まえ、養育者からの相談への対応や事故予防などに活かしていく必要がある。

キーワード：1～2歳 養育者 気になる行動 こわがる

I. 序論

1～2歳児は言語が未発達なことから、養育者とのやり取りは非言語的なコミュニケーションが大きな役割を果たしている。それだけに子どもの行動が気になる養育者も多い。合計特殊出生率が1.26（令和4年度現在）（厚生労働省, 2023）と低下し続けている現在、きょうだいを持たずに育ち、乳幼児に関わった経験を持たずに親となる。核家族化が進み、祖父母や周囲からの支援も少ない中、特に幼稚園、保育園などに未入園の児が多い1～2歳児の養育者は、孤独な育児「育児の孤立化」に陥りやすい。子どもがどのように発達、発育していくのかイメージできないまま、簡単に入手できるソーシャルネットワークなどからの情報とわが子が違うと不安を感じる養育者も多い（山下, 2023）。

育児不安の高まりは、子ども虐待へつながる大きなリスクとなる。また、小学校、中学校の通常級において教諭が、発達障害を持つと感じる児童・生徒の割合が8.8%（令和4年現在）と、前回調査の6.5%（平成24年調査）よりも上昇していることから、養育者の発達障害に対する認識や不安の高まりも推測される。

発達障害（神経発達症候群）のひとつの自閉スペクトラム症の特徴として、コミュニケーションの障害、反復的なパターン、感覚過敏や感覚鈍麻、こだわりなどがあげられ（和田, 2023、牧田, 2023、見松, 2022）、それらに類似する子どもの行動について、養育者の不安が高まっている可能性も考えられる。しかし、心配する子どもの行動（感覚過敏などに関連する行動として音や光をこわがる、いやがるなど）の具体的な内容について養育者が実際に記載した先行文献は見当たらない。子どもと多くの時間を過ごしている養育者が子どもの行動をどのようにとらえているのか、月齢ごと、性別ごとの行動の特徴を把握することにより、養育者や子どもに沿った支援がより行えるのではないかと考えた。

日本語版Infant-Toddler Social and Emotional Assessment（以下、ITSEA）は1～2歳の幼児の社会・情緒的問題を査定する尺度である。普段子どもの世話をしている養育者が子どもの行動について回答し、子どもの外在化領域、内在化領域、調整不全領域、能力領域について査定できる。子どもの行動には特定のものや場所、環境をこわがるということも含まれる。子どもの行動やこわがる対象についての記述回答（テキストデータ）として得られたものを分析することで、行動の出現の有無のみでは把握できない、養育者が心配する子どもの行動の具体的な内容を明らかにすることができると考えた。本研究では、発達の著しい1～2歳を対象として4月齢群（12～17か月、18～23か月、24～29か月、30～35か月）に分け、より細やかな月齢群ごとの子どもの行動の特徴をとらえることを目指した。

II. 研究目的

本研究では、1～2歳児の養育者が心配する、子どものこわがるものや場所、子どもの行動について、子どもの月齢、性別ごとの特徴を明らかにすることを目的とする。それにより子どもの行動に不安を感じている養育者への支援を有効に行うための一助としたい。

III. 方法

1. 研究方法 質問紙調査

2. 対象 特に先天的な疾患を持たない1～2歳児の養育者 1000名

3. 尺度 日本語版Infant-Toddler Social and Emotional Assessment（以下、ITSEA）：1～2歳の幼児の社会・情緒的な問題や能力について査定する尺度である。Alice S. Carterら（2006）により開発された。

子どもの主な養育者が170項目について、いいえ、ときどきある、よくあるの3件法で回答し、子どもの外在化領域得点、内在化領域得点、調整不全領域得点、能力領域得点が算出できる。

外在化領域は、周囲の人に対して向かう問題行動が含まれ、行動/衝動性6項目、攻撃性/反抗12項目、友達への攻撃6項目の3つの下位尺度で構成される。内在化領域は過度の不安や恐怖、抑うつなど本人に問題を生じさせる問題行動であり、うつ/ひきこもり9項目、全般的不安12項目、分離不安6項目、新奇性への抑制5項目の4つの下位尺度から構成されている。調整不全領域は行動と生理、感覚、注意、運動、情緒のプロセスを調整することへの問題などをさし、消極的感情13項目、睡眠5項目、食事9項目、感覚的感性7項目の4つの下位尺度から構成されている。能力領域は、子どもの社会・情緒的機能に影響を及ぼす能力をさし、順応性8項目、注意5項目、欲求の統制6項目、模倣/遊び6項目、共感7項目、友達との関係5項目の6つの下位尺度から構成されている。質問紙はSection A 42項目、Section B 95項目、Section C 5項目、Section D 9項目、Section E 17項目、子どもの行動についての心配の有無について問う2項目からなる。河村が原版をもとに日本語版ITSEAを開発し、その信頼性・妥当性を検証している（河村，2013）。

4. データ収集方法 日本語版ITSEA170項目を用いたweb調査、日本の地方9区分（北海道、東北、関東、北陸、中部、近畿、中国、四国、九州）から、政令指定都市・特別区とそれ以外で、人口構成（平成27年度国勢調査を基準とした）に比例した層化二段抽出法を用いて、マイボイスコム社の持つパネルから回答を募集した。web上での回答で、1つの設問への回答がないと次の設問が提示されない仕様となっている。無回答の方は最終的に回答の提出まで至らないためデータの欠損はないこととなる。本研究では日本語版ITSEA170項目のうちこわがるもの、場所などについての設問（以下、こわがる対象に関する設問）であるA8「特定の場所や動物、ものをこわがる」、B21「特定の動物をこわがる」、B22「特定のものをこわがる」、B23「店、エレベーター、公園、車など特定の場所をこわがる」、子どもの行動についての設問（以下、行動に関する設問）であるA36「楽しそうでもないのに同じ動きやことばを何度も繰り返す」、A37「体をゆすったり、くるくる回ったり、手をひらひらするといような特定の動作を何度も繰り返す」、A41「頭をうちつけるなど、わざと自分を傷つける」、A42「たとえば紙や絵の具など、食べ物以外のものを食べたり飲んだりする」、C5「子どもらしくない、こわいこと、気持ちの悪いことを言うことが他の子より多い」、E15「あまり楽しそうでもなく、同じごっこ遊びを繰り返し行う」、E16「とても奇妙な癖がある」、E17「噛んではいけないものを噛む」、の12項目に付随する記述回答の内容を調査対象とした。
5. データ収集期間 令和4年2月16日～2月22日
6. データ分析方法 月齢群別（12～17か月、18～23か月、24～29か月、30～35か月）に項目の平均得点について、一元配置分散分析を用いて検討した。さらにBonferroniの補正をした多重比較を実施した。男女別の項目の平均得点について、t検定を用いて比較した。統計的有意水準の設定は両側検定5%未満とした。記述項目の内容について、こわがる対象に関する設問であるA8、B21、B22、B23、行動に関する設問であるA36、A37、A41、A42、C5、E15、E16、E17に分けて、月齢群別、男女別の傾向を、テキストマイニングを用いて分析した。抽出する語について、否定助動詞、感動詞を除くとした。

こわがる対象に関する設問については、「こわがる」、「怖がる」、「場所」、「ばしょ」、「人」、「ひと」、「思う」、「怖い」は怖がる場所について尋ねている設問のため使用しない語として指定した。「掃除機」、「お面」、「仮面」、「はなび」、「知らない」、「カット練習用マネキン」は、「面」、「はな」、「カット」な

ど意味が分かりづらい抽出を避けるために強制抽出とした。また、複数の標記が存在する語について「鬼」、「おに」、「オニ」を「鬼」に、「打ち付ける」を「打ちつける」に統一した。行動に関する設問については、「くるくる」と「クルクル」の表記ゆれを「くるくる」に統合した。行動としてわかりづらいため「くるくる回る」「クルクル回る」を強制抽出した。その他に「毛」「玉」から「毛玉」、「思い」「通り」から「思い通り」、「癩癩」「起こす」から「癩癩を起こす」、「つね」「首」から「首つねつね」を強制抽出と指定した。行動に直結する体の部位である「体」、「頭」、「後頭部」、「口」、「手」、「腕」、「お腹」、「指」、「胸」、「膝」、「脚」については、KIWCコーダンスのコロケーション集計を用いて、前後5語に出現する語を集計した。形態素解析にはMeCabを用いた。抽出した語について、語同士の類似性と共起性を示すJaccard係数を算出し、各群を特徴づける特徴語のリストを作成、それに基づく共起ネットワーク図を作成した。分析にはSPSS Ver.28、KH Coderを用いた。

7. 倫理的手続き 和洋女子大学人を対象とした研究倫理委員会の承認を得て実施した。回答者に対しては、web調査の冒頭で、研究の説明文書を提示し、同意する方のみ回答へ進む手順とした。回答者にはマイボイスコム社から謝礼としてポイントが進呈されることとなっている。データについては、個人情報情報の漏洩を防ぐため、氏名の回収はせず、IDに属性、回答を紐づけて収集した。

IV. 結果

1. 属性

回答者の住所地は、北海道37名、東北地方44名、関東地方388名、北陸地方46名、中部地方134名、近畿地方172名、中国地方53名、四国地方28名、九州地方98名であった。男女各500名の児の養育者から回答を得た。養育者の平均年齢は35.07歳 (SD5.06)、父親324名、母親676名であった。児の月齢は12~17か月、18~23か月、24~29か月、30~35か月各250名であった (表1参照)。

表1. 対象者の属性

		人	%
性別	男児	500	50.0%
	女児	500	50.0%
月齢群	12-17 か月	250	25.0%
	18-23 か月	250	25.0%
	24-29 か月	250	25.0%
	30-35 か月	250	25.0%
妊娠週数	37週 以降	940	94.0%
	37週未満	60	6.0%
出生時体重	2500g 以上	913	91.3%
	2500g未満	87	8.7%
回答者の続柄	父親	324	32.4%
	母親	676	67.6%

2. 月齢群別、男女別の12項目についての得点傾向、各項目の男女別、月齢群別の平均得点について表2に示す。

3. 各項目の平均得点の比較

月齢群別平均得点：A37について、12~17か月児と24~29か月児間 ($p=.025$)、18~23か月児と24~29か月児間 ($p=.005$)、30~35か月児間 ($p=.015$) で有意な差が見られた。A41について、24~29か月児と12~17か月児との間 ($p=.011$)、18~23か月児との間 ($p=.01$) に有意な差が見られた。

A42について、12~17か月児と18~23か月児との間 ($p<.000$)、24~29か月児との間 ($p<.000$)、30~35か月児との間 ($p<.000$) で有意な差が見られた。E17について、12~17か月児と18~23か月児との間 ($p=.047$)、24~29か月児との間 ($p<.000$)、30~35か月児間 ($p<.000$) で有意な差が見られた。

男女別平均得点：A41について、男児が女児よりも有意に高い傾向であった ($p=.005$)。E17について、男児が女児よりも有意に高い傾向であった ($p<.000$)。

表2. 各項目の平均得点（月齢群別、男女別）の比較

項目	属性	平均得点(SD)	標準誤差	95% 信頼区間		p 値	多重比較
				下限	上限		
項目 A8 特定の場所や動物、ものをこわがる	12～17か月	0.14 (0.44)	0.03	0.09	0.19	0.385	
	18～23か月	0.18 (0.48)	0.03	0.12	0.24		
	24～29か月	0.19 (0.52)	0.03	0.12	0.25		
	30～35か月	0.22 (0.53)	0.03	0.15	0.28		
	性別						
男児	0.17 (0.49)	0.02	0.15	0.19	0.522		
女児	0.19 (0.50)	0.02	0.17	0.21			
項目 A36 楽しそうでもないのに同じ動きやことばを何度も繰り返す	12～17か月	0.06 (0.30)	0.02	0.03	0.10	0.289	
	18～23か月	0.05 (0.23)	0.02	0.02	0.08		
	24～29か月	0.02 (0.18)	0.01	0.00	0.05		
	30～35か月	0.06 (0.28)	0.02	0.02	0.10		
	性別						
男児	0.04 (0.23)	0.01	0.03	0.05	0.265		
女児	0.06 (0.27)	0.01	0.05	0.07			
項目 A37 体をゆすったり、くるくる回ったり、手をひらひらすというような特定の動作を何度も繰り返す	12～17か月	0.24 (0.24)	0.04	0.17	0.31	0.001	12～17か月 > 24～29か月
	18～23か月	0.26 (0.26)	0.03	0.19	0.32		18～23か月 > 24～29か月
	24～29か月	0.12 (0.12)	0.02	0.07	0.17		18～23か月 > 30～35か月
	30～35か月	0.13 (0.13)	0.03	0.08	0.18		
	性別						
男児	0.19 (0.47)	0.02	0.17	0.21	0.947		
女児	0.19 (0.47)	0.02	0.16	0.21			
項目 A41 頭を打ちつけるなど、わざと自分を傷つける	12～17か月	0.16 (0.42)	0.03	0.11	0.22	0.002	12～17か月 > 24～29か月
	18～23か月	0.16 (0.41)	0.03	0.11	0.22		18～23か月 > 24～29か月
	24～29か月	0.07 (0.25)	0.02	0.04	0.10		
	30～35か月	0.08 (0.33)	0.02	0.04	0.13		
	性別						
男児	0.15 (0.40)	0.02	0.13	0.17	0.005		
女児	0.09 (0.32)	0.01	0.07	0.10			
項目 A42 たとえば紙や絵の具など、食べもの以外のものを食べたり飲んだりする	12～17か月	0.42 (0.67)	0.04	0.34	0.50	0.000	
	18～23か月	0.18 (0.48)	0.03	0.12	0.24		
	24～29か月	0.09 (0.35)	0.02	0.05	0.14		
	30～35か月	0.11 (0.38)	0.02	0.06	0.16		
	性別						
男児	0.20 (0.51)	0.02	0.18	0.22	0.950		
女児	0.20 (0.50)	0.02	0.18	0.22			
項目 B21 特定の動物をこわがる	12～17か月	0.05 (0.23)	0.02	0.02	0.08	0.242	
	18～23か月	0.09 (0.34)	0.02	0.05	0.13		
	24～29か月	0.1 (0.37)	0.02	0.05	0.14		
	30～35か月	0.1 (0.34)	0.02	0.06	0.14		
	性別						
男児	0.08 (0.32)	0.01	0.07	0.09	0.697		
女児	0.09 (0.33)	0.01	0.07	0.10			
項目 B22 特定のものをこわがる	12～17か月	0.11 (0.38)	0.02	0.06	0.16	0.193	
	18～23か月	0.16 (0.48)	0.03	0.10	0.22		
	24～29か月	0.16 (0.45)	0.03	0.10	0.21		
	30～35か月	0.2 (0.51)	0.03	0.13	0.26		
	性別						
男児	0.15 (0.44)	0.02	0.13	0.17	0.783		
女児	0.16 (0.47)	0.02	0.14	0.18			
項目 B23 店、エレベーター、公園、車など特定の場所をこわがる	12～17か月	0.03 (0.22)	0.01	0.00	0.06	0.110	
	18～23か月	0.04 (0.24)	0.02	0.01	0.07		
	24～29か月	0.06 (0.28)	0.02	0.02	0.10		
	30～35か月	0.09 (0.32)	0.02	0.05	0.13		
	性別						
男児	0.05 (0.26)	0.01	0.04	0.06	0.349		
女児	0.06 (0.28)	0.01	0.05	0.08			
項目 C5 子どもらしくない、こわいこと、気持ちの悪いことをいうことが他の子より多い	12～17か月	0.11 (0.32)	0.07	-0.05	0.26	0.179	
	18～23か月	0.03 (0.18)	0.02	0.00	0.07		
	24～29か月	0.05 (0.25)	0.02	0.02	0.09		
	30～35か月	0.1 (0.35)	0.02	0.05	0.14		
	性別						
男児	0.05 (0.24)	0.02	0.04	0.07	0.241		
女児	0.08 (0.32)	0.02	0.06	0.10			
項目 E15 あまり楽しそうでもなく、同じごっこ遊びを繰り返す	12～17か月	0.03 (0.24)	0.02	0.00	0.06	0.348	
	18～23か月	0.04 (0.22)	0.01	0.02	0.07		
	24～29か月	0.01 (0.11)	0.01	0.00	0.03		
	30～35か月	0.04 (0.23)	0.01	0.01	0.06		
	性別						
男児	0.02 (0.18)	0.01	0.01	0.03	0.165		
女児	0.04 (0.22)	0.01	0.03	0.05			
項目 E16 とても奇妙な癖がある	12～17か月	0.03 (0.20)	0.01	0.01	0.06	0.965	
	18～23か月	0.03 (0.21)	0.01	0.00	0.05		
	24～29か月	0.02 (0.18)	0.01	0.00	0.05		
	30～35か月	0.03 (0.22)	0.01	0.00	0.06		
	性別						
男児	0.02 (0.22)	0.01	0.01	0.03	0.270		
女児	0.04 (0.18)	0.01	0.03	0.05			
項目 E17 噛んではいけないものを噛む	12～17か月	0.24 (0.58)	0.04	0.17	0.31	0.000	
	18～23か月	0.14 (0.42)	0.03	0.09	0.19		
	24～29か月	0.07 (0.29)	0.02	0.04	0.11		
	30～35か月	0.08 (0.33)	0.02	0.04	0.13		
	性別						
男児	0.19 (0.22)	0.02	0.17	0.21	0.000		
女児	0.08 (0.51)	0.01	0.06	0.09			

* 月齢群間は、Bonferroniの補正をした一元配置分散分析による多重比較、男女間にはt検定

4. 月齢群別、男女別の記述内容の特徴

記述回答があった項目について、こわがる対象に関する設問（A8、B21、B22、B23）、行動に関する設問（A36、A37、A41、A42、C5、E15、E16、E17）に付随して記載された記述内容をそれぞれ統合したものを分析した。

(1) こわがる対象

記述内容から抽出された語の出現回数を表3に示す。月齢群ごとに抽出された語の特徴は、12～17か月児では、「掃除機」、「音」、「ルンバ」、「アプリ」などであった（表4参照）。18～23か月児、24～29か月児、30～35か月児では、「鬼」、「暗い」、「病院」、「犬」などであった。「鬼」の前後の文脈を確認したところ、「マンガの鬼」、「鬼の面」、「節分の鬼」、「鬼、おばけ」などが見られた。男女別ごとに抽出された語の特徴は、女兒は、「鬼」、「暗い」、「病院」、男児は、「犬」、「ルンバ」、「掃除機」であった（表5参照）。それぞれの語が共起する関係性について、Jaccard係数を用いて、月齢群を外部変数として共起ネットワーク図を作成した（図1参照）。

(2) 子どもの行動

記述内容から抽出された語の出現回数を表6に示す。月齢群ごとに抽出された語の特徴は、12～17か月児では、「紙」、「頭」、「絵本」、18～23か月児では、「くるくる回る」、「頭」、「壁」、24～29か月児では、「怒る」、「ゴンゴン」、「思い通り」、30～35か月児では、「噛む」、「怒る」、「つま先立つ」であり（表7参照）、男女別にみると、女兒は、「紙」、「口」、「入れる」、男児は、「頭」、「くるくる回る」、「壁」であった（表8参照）。「紙」の文脈を確認すると「紙、ゴミなどを口に入れる」、「紙を食べようとする」などが見られた。「ゴンゴン」の文脈を確認すると「頭をゴンゴン打ちつける」などが見られた。「体」の前後には「ゴンゴン」、「聴く」、「頭」が、「頭」の前後には「壁」、「打ちつける」、「床」が、「後頭部」の前後には「ドア」、「打ちつける」、「壁」が、「口」の前後には「入れる」、「入る」、「紙」が、「手」の前後には「キラキラ」、「くるくる回る」、「叩く」が、「腕」の前後には「ママ」、「噛む」が、「胸」の前後には「親」、「打ちつける」、「腕」が、「お腹」の前後

表3. 子どもがこわがる対象として抽出された語の出現回数

(2回以上)			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
鬼	43	トイレ	2
犬	17	ドラマ	2
暗い	14	ホラー	2
掃除機	13	仮面	2
ルンバ	10	外食	2
病院	10	滑り台	2
ロボット	9	救急	2
お面	8	泣く	2
音	8	金魚	2
恐竜	7	苦手	2
初めて	7	高い	2
実家	6	室内	2
大きい	5	手袋	2
サイレン	4	新しい	2
ドライヤー	4	診察	2
車	4	節分	2
人形	4	洗車	2
虫	4	祖父	2
動物	4	掃除	2
アニメ	3	待合室	2
ライオン	3	大人	2
顔	3	男性	2
魚	3	猫	2
公園	3	部屋	2
黒い	3	風船	2
知らない	3	風呂	2
動く	3	物	2
アクロバット	2	遊具	2
カット練習用	2	郵便	2
キャラクター	2	浴槽	2
チェーン	2	雷	2
テレビ	2		

表4. 月齢群別子どもがこわがる対象

12-17か月		18-23か月		24-29か月		30-35か月	
掃除機	.012	鬼	.041	鬼	.033	鬼	.041
黒い	.008	犬	.015	お面	.016	暗い	.020
男性	.008	病院	.012	犬	.015	犬	.015
音	.008	暗い	.012	恐竜	.012	滑り台	.008
ルンバ	.008	サイレン	.008	病院	.012	公園	.008
アプリ	.004	ロボット	.008	暗い	.012	高い	.008
ウィッグ	.004	実家	.008	テレビ	.008	雷	.008
オープニング	.004	初めて	.008	トイレ	.008	動物	.008
カット練習用マネキン	.004	ルンバ	.008	ライオン	.008	ロボット	.008
カビバラスマホ	.004	エミュー	.004	動く	.008	車	.008

* 数値はJaccard係数

表5. 男女別子どもがこわがる対象

女兒		男児	
鬼	.035	犬	.014
暗い	.016	ルンバ	.010
病院	.010	掃除機	.010
お面	.008	初めて	.008
虫	.006	動く	.006
実家	.006	ロボット	.006
ドライヤー	.004	恐竜	.006
顔	.004	大きい	.006
泣く	.004	アニメ	.004
黒い	.004	魚	.004

* 数値はJaccard係数

表6. 子どもの行動

(2回以上)			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
頭	44	注意	3
くるくる回る	24	髪の毛	3
口	24	遊ぶ	3
紙	23	お湯	2
壁	22	サークル	2
打ちつける	19	シール	2
絵本	18	スプーン	2
床	18	チラシ	2
入れる	18	ベビー	2
手	12	ペン	2
噛む	10	リズム	2
落ちる	9	飲み込み	2
クレヨン	7	歌う	2
ゴミ	7	角	2
回る	7	楽しむ	2
食べる	7	玩具	2
怒る	7	泣く	2
叩く	6	胸	2
音楽	5	後頭部	2
石	5	砂	2
本	5	取る	2
腕	5	拾う	2
ゴンゴン	4	充電ケーブル	2
ティッシュ	4	床や	2
思い通り	4	場	2
親	4	人	2
服	4	積み木	2
お腹	3	多い	2
キラキラ	3	体	2
ダンス	3	痛い	2
ティッシュペーパー	3	入る	2
飲み込み	3	膝	2
鉛筆	3	紐	2
歌	3	布団	2
机	3	風呂	2
気に入る	3	歩く	2
指	3	毛玉	2
小さい	3	踊る	2
場所	3	来る	2
段ボール	3	理由	2

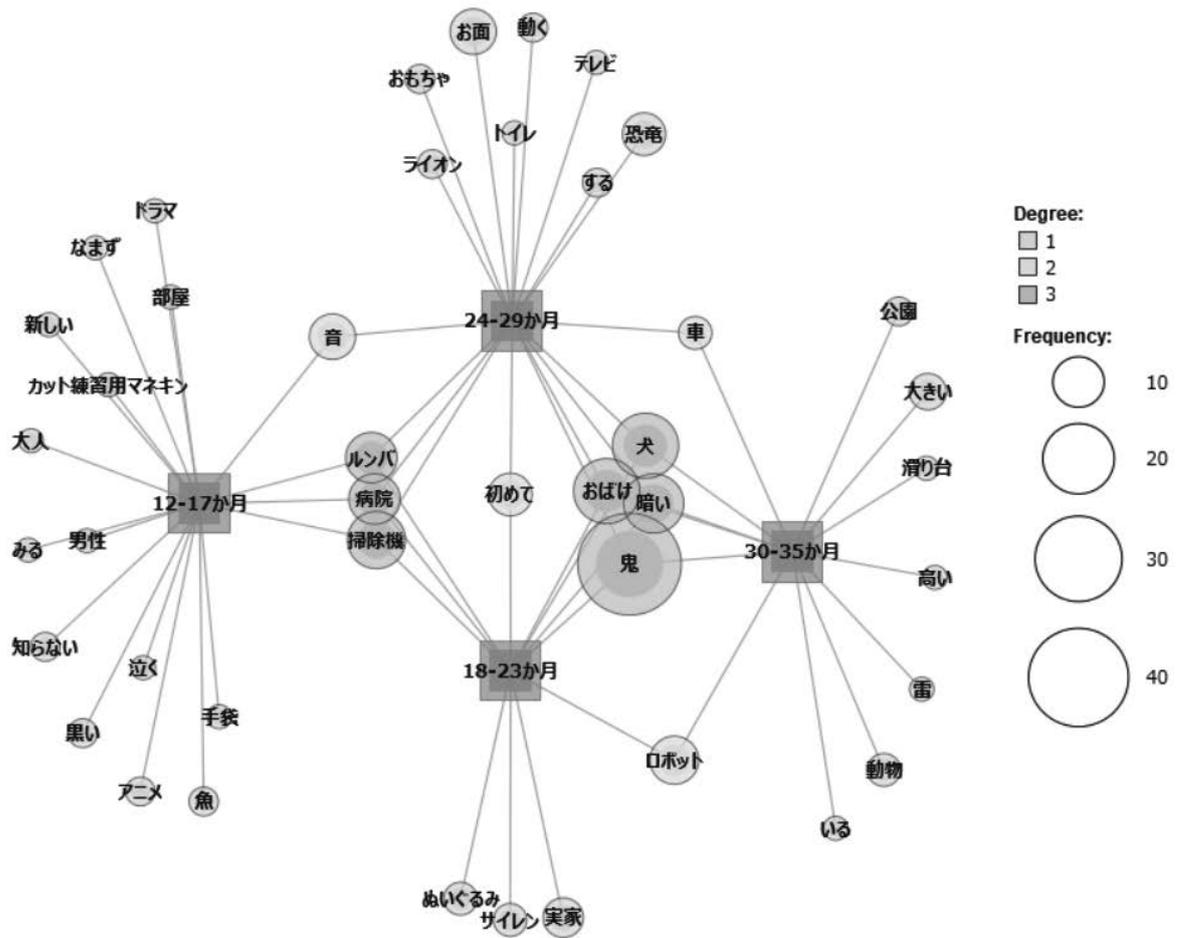


図1. 月齢群別子どもがこわがる対象

表7. 月齢群別子どもの行動

12-17か月		18-23か月		24-29か月		30-35か月	
紙	.066	くるくる回る	.054	怒る	.016	噛む	.012
頭	.061	頭	.050	ゴンゴン	.008	怒る	.008
絵本	.048	壁	.030	思い通り	.008	つま先立つ	.004
口	.043	打ちつける	.027	回る	.008	まね	.004
床	.035	手	.023	シート	.004	カンカン	.004
壁	.034	口	.023	タイヤ	.004	ジャンプ	.004
入れる	.031	入れる	.019	チャイルド	.004	ティッシュ	.004
食べる	.028	歌	.012	含む	.004	トレーナー	.004
手	.023	石	.012	起こす	.004	首つねつね	.004
打ちつける	.023	回る	.012	脚	.004	小石	.004

* 数値はJaccard係数

には「空く」、「袖」、「部分」が、「指」の前後には「親」、「壁」、「スリッパ」が、「膝」の前後には「座る」、「親」、「キラキラ」が、「脚」の前後には「くるくる回る」が多く出現していた。それぞれの語が共起する関係性について、Jaccard係数を用いて、月齢群、男女を外部変数として共起ネットワーク図を作成した（図2、図3参照）。

表8. 男女別子どもの行動

女兒		男兒	
紙	.024	頭	.060
口	.022	くるくる回る	.032
入れる	.016	壁	.024
噛む	.010	床	.022
落ちる	.010	打ちつける	.022
回る	.008	絵本	.020
食べる	.008	手	.018
ダンス	.006	叩く	.010
親	.006	怒る	.010
思い通り	.006	ゴンゴン	.008

* 数値はJaccard係数

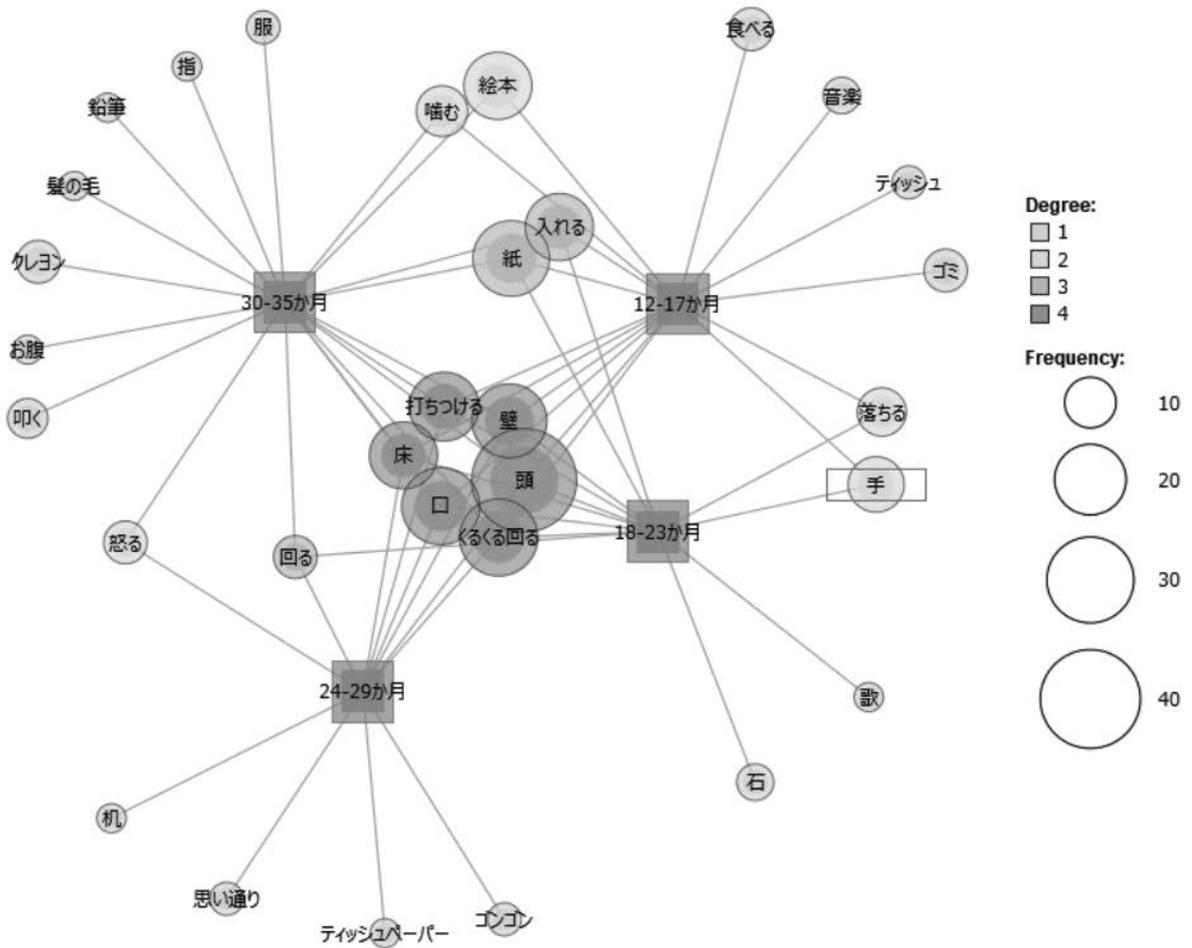


図2. 月齢群別子どもの行動

えるだろう。A41「頭をうちつけるなど、わざと自分を傷つける」でも同様の傾向であり、12～23か月の児について、24～29か月の児よりも多く見られることがわかった。

A42「たとえば紙や絵の具など、食べもの以外のものを食べたり飲んだりする」については、12～17か月児において他の月齢群よりも多く見られていた。同様にE17「嚙んではいけないものを嚙む」も、12～17か月児において、他の月齢群よりも多く見られていた。フロイト（Sigmund Freud, 1977）の唱えた口唇期が生後1歳半くらいまでを指すことやピアジェの唱える認知発達理論における感覚運動期（波多野, 1979）と合致している結果ともいえる。自ら手を伸ばし、なんでも口に入れて確かめる時期であり、窒息、誤嚥事故の発生件数も多い月齢（消費者庁消費者安全課, 2022）であるため、支援者、養育者ともに子どもの行動特徴として再認識する必要があるといえる。

2. 性別ごとの平均得点の差異について

A41「頭をうちつけるなど、わざと自分を傷つける」行動については、男児の方が多い傾向が見られた。自閉症スペクトラムについては、男性の有病率が高いことが明らかになっているが、通常発達の児を対象としたITSEA日本語版を用いた先行研究（Yago, 2015）においても、男児が女児に比して外在化領域得点が高い、すなわち攻撃性や衝動性の高さが見られており、合致した結果であるといえる。

3. 子どもがこわがる対象について

12～17か月では、「掃除機」、「音」、「ルンバ」が上位にあがっており、他にも「アプリ」、「オープニング」など、音を出すもの、出るものをこわいものとみなすことが多いと推測される。18か月以降、3群とも「鬼」があげられている。「鬼」の前後の文脈から「マンガの鬼」、「鬼の面」、「節分の鬼」などに加え、「おぼけ」と並んで記載されているものが多く見られた。また18か月以降では、「犬」、「エミュー」、「ライオン」など動物があがっている。30か月以降では「公園」、「滑り台」、「高い」など体験の広まりとそれに伴ってのこわいものが出てくることがわかる。共起ネットワーク図はそのバブルの大きさが頻度を表しており、12～17か月の子どもがこわいと感じることが、個々に異なるのに対して、18か月以降は、「鬼」、「犬」、「暗い」のようにこわいものが定まってくる印象を受ける。12～17か月の児は言葉によるコミュニケーションがとりづらいため、子どもがこわがっていると認識しているものが実際のこわいものと一致していないという可能性もあるかもしれない。

4. 子どもの行動について

12～17か月児では、「紙」、「絵本」、「食べる」、「口」が上位にあがっており、A42「たとえば紙や絵の具など、食べもの以外のものを食べたり飲んだりする」、E17「嚙んではいけないものを嚙む」の得点の高さと連動した結果といえる。12～23か月児の月齢群では「頭」が、また、24～29か月児では「ゴンゴン」が上位にあがっており、「頭を打ちつける」、「頭をゴンゴン打ちつける」などの行動が多いことがわかる。18～23か月児では、「くるくる回る」といった行動が上位に見られる。発達障害についての不安が高まっている現在、自閉症スペクトラムの特徴であることを認識している養育者も多いと思われる。不要に心配し過ぎないような声掛け、そして他にどのような行動が見られるかを聞き取り観察するなど個々に合わせた支援が求められる。30～35か月児では、「まね」という言語が上位にあがっており、模倣が可能になり、行動に取り入れることが多くなっていることが推測される。男女別にみると、男児女児ともに「くるくる回る」、「嚙む」、「頭」などの頻度が高く、バブルが大きい。男児は「ゴンゴン」、「叩く」などの周囲の

物や人に向かう外在化行動の頻度が高く、女兒は「飲み込み」、「入れる」などが多い。加えて、男児に比して、女兒の行動は細分化していることが特徴であるといえる。

VI. 結論

1～2歳児の養育者が心配する、子どものこわがるものや場所、子どもの行動について、日本語版ITSEAを用いて調査、分析したところ以下の結果が得られた。

1. 子どもがこわがる対象として、低月齢では音の出るものが多く、月齢があがると体験に基づくものが対象となっていた。
2. 体をゆする、手をひらひら動かす、頭を打ちつける、くるくる回るなどの行動は、12～23か月児に多く見られ、月齢が上がると減少していた。
3. 食べられないものを口に入れたり噛んだりする行動は、12～17か月の児に多く見られ、月齢が上がると減少していた。
4. 男女ともに、くるくる回る、噛む、頭を打ちつける行動は多かったが、男児の方が叩くといった行動が多く、女兒は口に入れるといった行動が多かった。
5. 月齢、性別ごとのこわがる対象、気になる行動の特徴を踏まえ、養育者からの相談への対応や事故予防に活かしていく必要がある。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、日本語版ITSEAの設問を用いての調査のため、養育者の回答が完全に自由な回答とはいえない。そのため、養育者が心配する、子どものこわがるものや場所、子どもの行動についてすべてを調査できたとはいえない。また、調査対象を先天的疾患のない児としており、発達障害などを持つ児と持たない児が混在していることが推測され、定型発達児のデータとはいえない。

今回の記述内容をもとに、日本語版ITSEAの下位尺度得点、領域得点との関連を検討し、さらなる特徴を見出すこと、自閉症スペクトラムなどの発達上の問題を持つ児の養育者の回答を収集、分析することで発達上の問題を持つ子どもの特徴を見出すこと、それを親子への支援に還元していくことが求められる。

- ・本研究は、JSPS科学研究費20K 10844の助成を受けて実施した。
- ・公開すべき利益相反はない。

文献

Alice S. Carter, J M, Briggs-Gowan. Infant-Toddler Social and Emotional Assessment(ITSEA) examiner's manual. San Antonio: Harcourt Assessment, Inc; 2006.

波多野完治, 久原恵子. ピアジェの発達心理学. 国土社, 1979.

河村 秋. 乳幼児の社会・情緒的問題の評価尺度 日本語版ITSEAの開発と信頼性妥当性の検討. お茶の水看護学雑誌, 2013, 8(1): 28-41.

厚生労働省 政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室. 令和4年(2022)人口動態統計月報年計(概数)の概況2023. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai22/dl/h2.pdf> (2023. 9. 20アクセス).

京林 由季子. 「気になる子」の行動特性に関する保育者の認識 SDQを用いた検討. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 2020, 26: 97-103.

牧田 みずほ, 本田 秀夫. 神経発達症 概念の変遷と診断について. 治療2023, 105(8): 992-95.

見松 はるか, 吉川 徹. 発達障害は何歳で気づくことができるか. チャイルドヘルス, 2022, 25. (3): 186-190.

森野 百合子. ICD-11における神経発達症群の診断について ICD-10との相違点から考える. 精神神経学雑誌, 2021, 123(4): 214-20.

Sigmund Freud, 高橋義孝, 下坂幸三訳. 精神分析入門. 新潮文庫, 1977.

消費者庁消費者安全課. 子どもの不慮の事故の発生傾向～厚生労働省「人口動態調査」より～. 窒息事故の発生傾向2022.

https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/67dba719-175b-4d93-8f8c-2ecd4ea36a6/e5098069/20220323_child_safety_actions_review_meetings_2022_doc_02_1.pdf (2023. 9. 20アクセス).

和田 真. 発達障害者の感覚の問題. 国立障害者リハビリテーションセンター研究所, 2023.

<https://hattatsu.go.jp/ddnp/notice/page/3/> (2023. 10. 24アクセス).

Yago S, Hirose T, Kawamura A, Omori T, Okamitsu M. Gender, age, and cultural differences in the Japanese version of the Infant-Toddler Social and Emotional Assessment. *Journal of Medical and Dental Sciences*. 2015, 62: 91-101.

山下 華歩. 母子保健コーディネーターが捉える母親達の悩みの実態. *南九州看護研究誌*, 2023; 21(1): 9-16.

河村 秋 (和洋女子大学 看護学部 看護学科 准教授)

小淵 隆司 (北海道教育大学釧路校 教授)

小稲 文 (国際医療福祉大学成田看護学部 助教)

矢郷 哲志 (東京医科歯科大学 助教)

(2023年12月12日受理)